

森林に対する若者の意識調査

南木曾・蘭森林事務所 ○ 山本 通明
 黒田 治男
 (前) 藤井 誠

はじめに

近年地球規模の環境問題が叫ばれ、国民の森林に対する関心は日々の高まりを見せている。このような中において21世紀を担う若者が森林についてどのような意識を持っているのか、又、地域によってとらえ方がどのように違うのか、現状を把握し、今後の森林教室等国有林のPR活動に活用していきたいと考えた。

そこで、当署では地元の中学生と都会の中学生を対象にアンケートをとり、森林に対する若者の意識調査を行った。

1 調査方法

地元の中学生としては、南木曾中学校3年生の全員84名を対象に、都会の中学生としては、昨年5月に当署国有林において体験植樹・森林教室を行った千葉県船橋市立二宮中学校3年生の1組と7組の78名を対象として、両校へアンケート用紙を配布し、10項目のアンケートに複数回答で応えてもらった。

回収率は南木曾中学が92%、二宮中学が90%であった。

2 両中学校及び所在地の概況

表-1

	南木曾町	船橋市		南木曾中学校		二宮中学校	
				3年生	全校	3年生	全校
人口(千人)	6	538					
面積(km ²)	216	86	男子				
森林面積(km ²)	204	5	(人)	41	117	174	418
森林率(%)	94	6	女子				
主要樹種	ヒノキ	マツ	(人)	43	114	136	419
	アカマツ スギ・L	イチョウ スギ・L	計	84	231	310	837

3 結果

(1) 「月に何回ぐらい森林に行きますか。」の問に対して、南木曾中学校では「ほとんど行かない」という答えが60%を占め、それに対し二宮中学校は90%となっている。このことから両校ともに森林に対する関心が少ないことが分かる。(図-1)

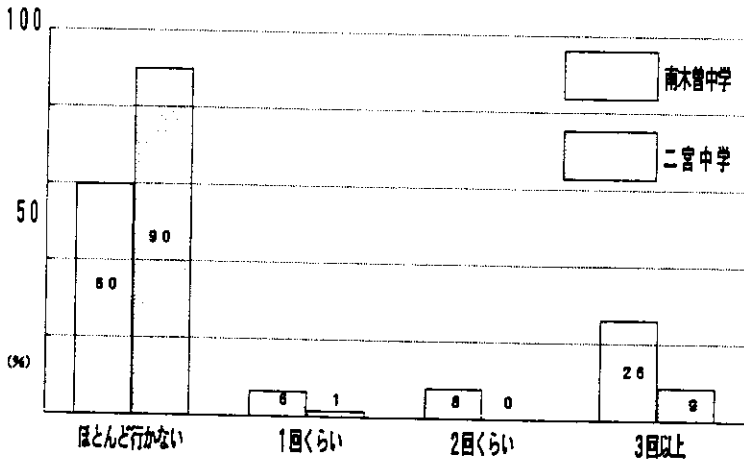


図-1 月に何回ぐらい森林に行くか

(2) 「最も親しみを感ずる森林は何んですか。」については、両校とも雑木林・スギ林・ヒノキ林・木曾ヒノキ天然林が多くあまり違いは見られない。

二宮中学校でヒノキ林・木曾ヒノキ天然林という普段目にしない森林の割合も大きいのは、植樹や森林教室を体験したためだと考えられる。(図-2)

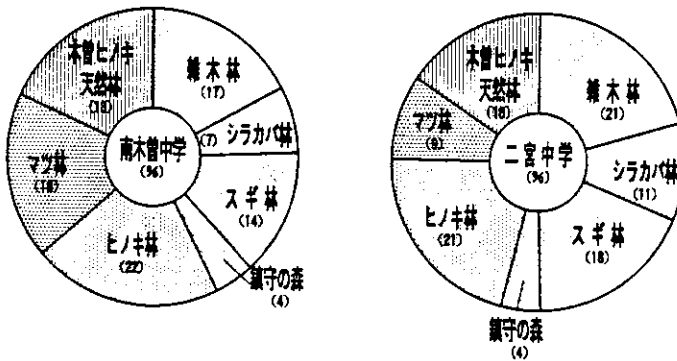


図-2 最も親しみを感ずる森林

(3) 「親しみを感じる樹木を5つあげて下さい。」の問いに対しては、南木曾中学校では木曾五木をあげる生徒が圧倒的に多く70%を占めている。

(図-3)

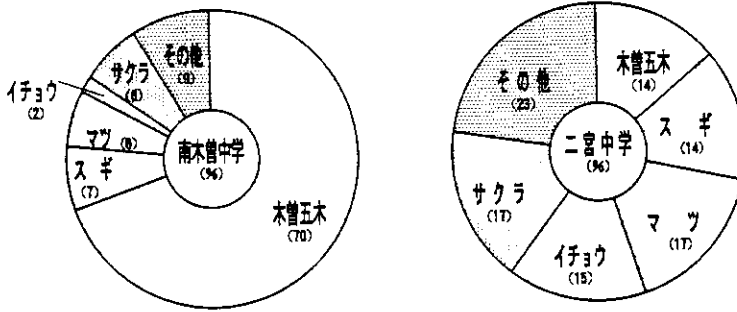


図-3 親しみを感じる木

(4) 「森林はどのような意味で大切だと思いますか。」では両校に大差は見られず公益的機能で70%以上を占めている。木材生産については、南木曾中学校で6%・二宮中学校で7%となっており、木材生産を町の地場産業としている南木曾町の中学校で想像以上に数値が低くなっている。(図-4)

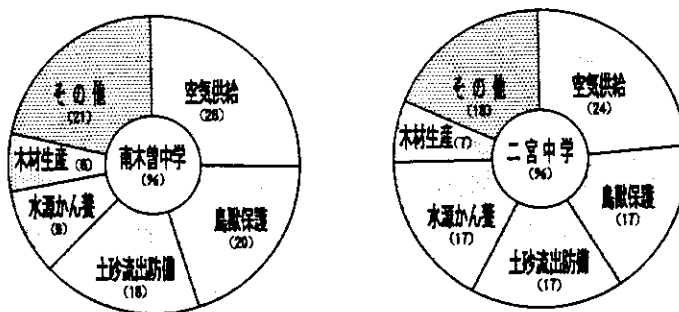


図-4 森林はどのような意味で大切か

(5) 「森林は生きていますか。」については、大部分の生徒が森林は生きていますと感じていることが分かる。(図-5)

そこで「はい」と答えた生徒に「森林が生きていますと感じる理由」を尋ねたところ、どちらの生徒とも四季の変化・木々の生長・草花を挙げており、この3つで70%を占めている。(図-5の1)

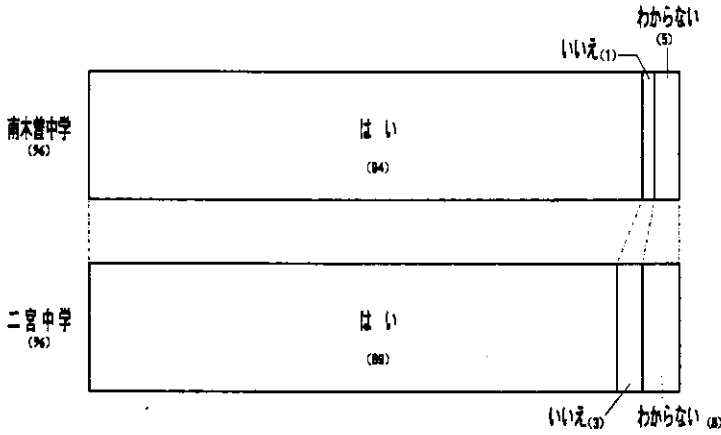


図-5 森林は生きていますか

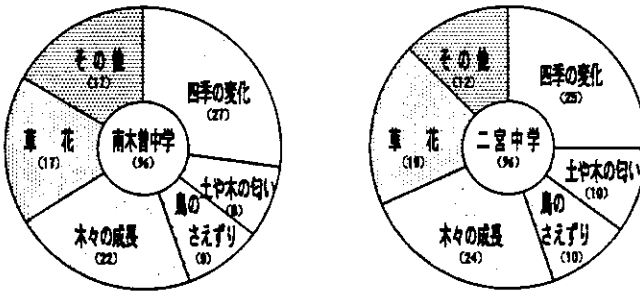


図-5の1 森林が生きていますと感じる理由

(6) 「森林に何を求めていきますか。」では、両校に大差はなく、新鮮な空気・やすらぎ・美しさ・静けさといった生活環境に対する期待の大きさを表している。(図-6)

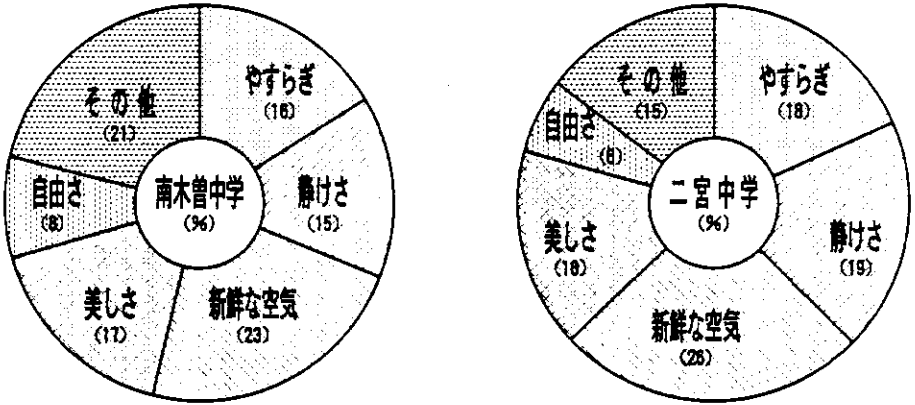


図-6 森林に何を求めて行くか

(7) 「森林からどんな感じを受けますか。」では、静さ・快さ等が多く、どちらとも似かよった内容となっている。(図-7)

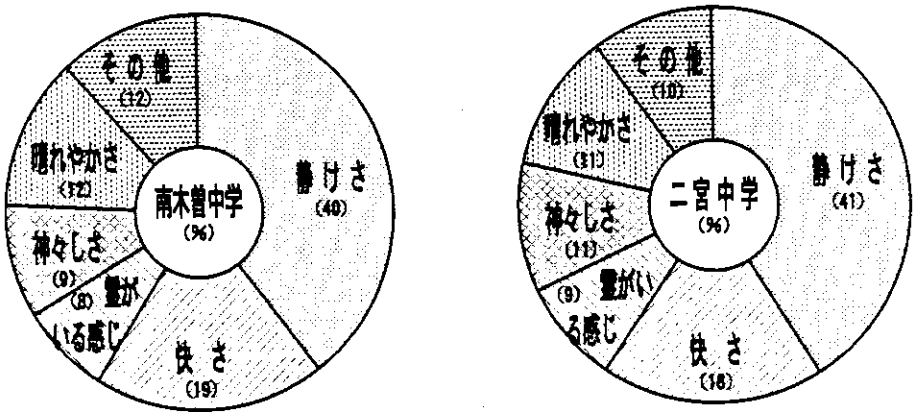


図-7 森林から受ける感じ

(8) 「『森林』という言葉から連想されるものは何ですか。」の問いに対しては、鳥と動物・空気等を主に挙げており両校で大きな違いは見られなかった。
(図-8)

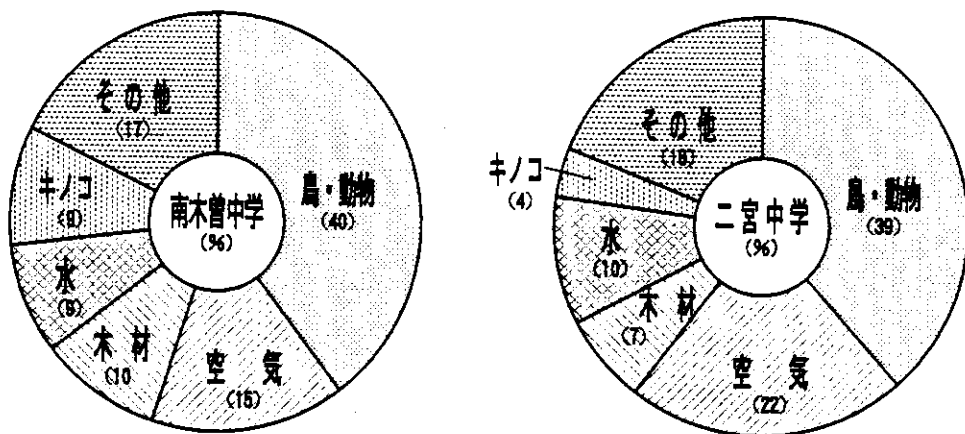


図-8 森林という言葉から連想されるもの

(9) 「森林に人手を加えることについてどう思いますか」に対しては、南木曾中学校より二宮中学校の方が「よいと思う」生徒のパーセンテージが高く、「わからない」との答えが少なくなっている。(図-9)

南木曾中学 (36)	良いと思う (28)	良いと思わない (30)	わからない (42)
二宮中学 (36)	良いと思う (42)	良いと思わない (31)	わからない (27)

図-9 森林に人手を加えること

(10) 「『人手が加わった自然』とはどんな自然だと思いますか。」の問いには、両校とも同じ傾向となっている。

この項目の回答には、自然破壊とスギ、ヒノキの人工林の双方に○を付ける生徒が多くみられた。(図-10)

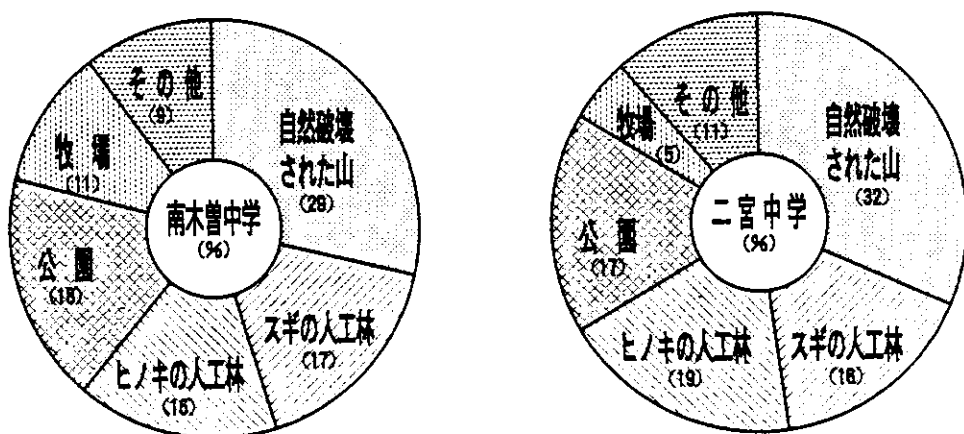


図-10 「人手が加わった自然」

4 問題点

今までのアンケート調査の結果から、森林に対しての若者の意識をまとめると、以下のようにいくつかの問題点が挙げられる。

- (1) 地元と都会の生徒による森林への意識に地域差は見られず、同じ傾向となっているが、その原因としてはマスコミの影響が大きいと思われる。
- (2) 南木曾町は林業・林産業等が基幹産業になっているにもかかわらず、南木曾中学校の生徒は木材生産のための森林の重要性を低くみており、二宮中学校と差がない。
- (3) 地元の生徒より都会の生徒の方が森林への手入れに対する関心や理解が高くなっている。(これは都会の生徒に対する森林教室の成果と考えられる)
- (4) 両校ともに人手が加わった自然を「自然破壊」との認識が3割もあり、森林に対する林業の役割が理解されていないといえる。

5 今後の取組み

上述の問題点に対して今後の取組みとしては、「翔ばそう子供の夢を森林へ」と題し、このとおり考えている。

(1) 森林教室の森を作る

伐採から植付・下刈・除伐・間伐までの林業の一連の流れを見学する場として、又、子供自身で体験する場として森林を活用できるようにする。

(2) 森林官を教室へ！先生を森林へ！

今年度から小学校5年生の社会科の教科書に「林業」が復活したのを機に、森林官が学校で地場産業である林業について話せる機会をもてるようにする。

又、屋外授業のフィールドとして森林を当て、自然の様々なメカニズムの学習・地理・社会・歴史の学習等、子供達が自由な発想で学べるようにする。

(3) 薪でトン汁！木の葉で焼きイモ！

森林教室等、森林内での学習は楽しいものでなくてはならない。山で食べるお弁当に、山でつくったトン汁を加えればおいしさは格別である。木材から木製品になるまでの集造材・運材・貯木場・製材所・木工品等様々な過程を楽しく学習出来るようにする。

(4) 治山ダムで沢ガニとのたわむれ

四季折々の森林の良さを、森林浴をしながら楽しんでもらう。治山現場の視察は治山・治水の重要性を知ってもらうには恰好の教材であり、沢ガニやクワガタとたわむれた思い出と、森林の持つ公益的機能への正しい理解を家庭に届ける。

以上の考え方を基に森林組合・役場・林研クラブ等とタイアップして森林の素晴らしさ・楽しさを知ってもらうために、森林事務所等の小さな単位から実現に向かって一步一步努力して行きたいと考えている。

おわりに

このアンケートを実施するにあたり、信州大学の菅原聡教授を始めとし、南木曾・二宮の両中学校の先生など御協力頂いた方々に御礼申し上げます。